

<b>Title</b>	ラ・フォン・ド・サン=ティエンヌ『考察』の研究(1)：出版の背景
<b>Author(s)</b>	田中，佳
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要，-No.54, 2013.2：267-284
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=4721">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=4721</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

# ラ・フォン・ド・サン＝ティエンヌ『考察』の研究（1）

——出版の背景——

田 中 佳

はじめに

ラ・フォン・ド・サン＝ティエンヌ (LA FONT DE SAINT-YENNE, Étienne; 1688–1771, 以下「ラ・フォン」と略) が一七四七年に匿名で出版した『フランスの絵画の現状の諸原因に関する考察』(以下、『考察』と略) は、十八世紀中葉のフランスの美術界に大きな衝撃を与えた著作である。<sup>(1)</sup> 本書は三つの点で「革命的」であった。第一に王立絵画彫刻アカデミー(以下、「アカデミー」と略)の会員展「サロン」の出品作を評するサロン批評の先駆となった。<sup>(2)</sup> 第二に、美術の専門的立場からの意見を述べるのではなく、「公衆 public」を作品判断の主体に据え、「公衆」を主語にした批評を展開した。第三に、王立美術ギャラリーを創設して国王のコレクションを恒常的に展示することを公に提案した、おそらく初めての出版物であった。

このようにきわめて重要な意味を持つ『考察』だが、これまでの美術史研究の中でその価値が十分に認められてきたとはいえない。ラ・フォンあるいは『考察』を主要な分析対象とした先行研究はかなり限られている。<sup>(3)</sup> 美術批評や美

術理論を扱う関連研究は、『考察』を美術批評の先駆に位置づけているが、その内容にまで踏み込んでいるケースはきわめて少ない。多くの研究者は、同書の刊行後の反響の影響を受けて、『考察』をきわめて前衛的で革新的な刊行物ととらえている。

筆者はこれまでに、ラ・フォンの業績と研究状況を整理し<sup>(4)</sup>、『考察』出版後にパリの美術界で展開された「論争」を分析してきたが、ここで改めて『考察』の内容そのものに眼を向け、ラ・フォンの意図するところを正しく読み解いていく必要があると考える。本稿では、今日までいかなる言語にも訳されていない『考察』の重要箇所抄訳を試み、解題を交えながら、内容を仔細に検討していきたい。

ここで原テキストについて整理しておく、まず一七四七年の時点で出版された著書自体は、画商および版画家として名高いピエール・ジャン・マリエット (MARLETTE, Pierre-Jean; 1694-1774) が収集を始めたサロン批評コレクションの一冊として、現在はフランス国立図書館の「コレクション・ドロワヌ」に収められている<sup>(6)</sup>。一七五二年には『考察』の第二版が他の著作との合本の形で刊行されるが、こちらは本コレクションには収められていない<sup>(7)</sup>。初版については、一九七〇年にジュネーヴのストラトキン社からリプリント版が刊行された<sup>(8)</sup>。その後二〇〇一年になって、十八世紀フランス美術史の大家ルネ・デモリスが、当時刊行された五点の美術批評を選んで編んだ撰集の中に本テキストを収めた<sup>(9)</sup>。また同年にはエティエンヌ・ジョラが、現在確認されているラ・フォンの全著作を集めて刊行している<sup>(10)</sup>。本稿で試みた翻訳は、原則としてストラトキンのリプリント版を定本としている。以下の引用では、特に断りのない限り、註に示すページ番号は同版のものとするが、必要に応じてデモリス版とジョレ版も参照した。

## 1. ラ・フォン・ド・サン＝ティエンヌの生涯

ここで本書の著者であるラ・フォンについて簡単に紹介しておく。<sup>(11)</sup>彼の生涯についてはよく判っていない部分も多く、材料も少ないが、最も有力な史料はパリ国立古文書館に保管されている遺産目録である。<sup>(12)</sup>それによると、一六八八年十二月八日にリヨンで生まれている。父は絹織物商人のピエール・ドラフォン (DELAFONT, Pierre)、母は妻マルグリット・トロワリエ (TROILLIER, Marguerite) である。幼少期の教育については不明だが、おそらく故郷のイエズス会のコレージュで古典の素養を身につけたのではないかと推測されている。<sup>(13)</sup>処女作とされるのは一七二五年の「ルイ大王の治世下における絵画の発展についての頌歌」であり、<sup>(14)</sup>ここには、彼の後の著作に繋がる基本的なモチーフ、すなわちルイ十四世の治世の礼讃と絵画の愛好がすでに現れている。

その後一七二九年に、王妃マリー・レクザンスカ (JESZCZYŃSKA, Marie Sophie; 1703–1768) に仕える貴族として宮廷に入る。<sup>(15)</sup>一年のうち三ヶ月間勤務する貴族の一人として、王妃の移動時や食事中の護衛に携わり、四〇〇リーヴルの報酬を得ていたとされる。<sup>(16)</sup>おそらくこの役職を通して下級の貴族身分 (chevalier あるいはécuyer) が付与された結果、父姓の「ドラフォン」ではなく、「ラ・フォン・ド・サン＝ティエンヌ」を名乗るようになったのであろう。

この任務は一七三七年まで八年間続いた。<sup>(17)</sup>宮廷への定期的な滞在は、国王コレクシオンや王室付きの美術家たちに精通する又とない機会であったに違いない。たとえば本書でも高く評価されているヴェルサイユ宮の「ヘラクレスの間」の天井画は、ラ・フォンと同年に生まれた画家フランソワ・ルモワヌ (LEMOYNE, François; 1688–1737) が一七三六年に完成させており、制作の時期はラ・フォンのヴェルサイユでの任務の期間と重なっていた。またこの間

に、王付き画家ノエル＝ニコラ・コワペル (COYPEL, Noël-Nicolas; 1690-1734) による絵画をもとに版刻された版画三点に銘辞を付している。<sup>(18)</sup>『考察』に延々と記される国王コレクシヨンの管理の実態に知悉したのも、おそらくこのヴェルサイユ滞在によるものであろう。

一七二九年秋には、任務とは関係ないものと思われるが、フランドルに旅行をしている。故郷リヨンの弁護士で同地の科学・文芸アカデミーの創設にも貢献したブロセット (BROSSETTE, Claude; 1671-1743) の紹介により、ラ・フォンは旅行中に、『考察』で「才人」と称えた敬愛する詩人ジャン＝バティスト・ルソー (ROUSSEAU, Jean-Baptiste; 1670-1741) を訪問した。帰国後の一七三三年には、ラ・フォンはヴォルテールが『趣味の殿堂』の中でルソーを激しく攻撃したことを心配して、ルソーを慰める手紙を送り、礼状も受け取っている。<sup>(19)</sup>

だが他方で、ラ・フォンはヴォルテール信奉者の側面も見せている。『考察』ではヴォルテールの『趣味の殿堂』の一節を、一部の語句に改変を加えて引用している。<sup>(20)</sup>ラ・フォンの著作全体に通底する未完成のルーヴル宮に対する嘆きも、ヴォルテールの詩節「ルーヴルについて」(一七四九年)に通じるものである。<sup>(21)</sup>ラ・フォンとヴォルテールの交流を証明する史料はほとんど知られていないが、唯一、ヴォルテールが一七五三年七月九日に姪のドウニ夫人に宛てた手紙の中で、ラ・フォンから手紙を受け取った事実が記されている。<sup>(22)</sup>

その後のラ・フォンの足取りを知る手がかりはほとんどないが、一七四一年にはパリに住んでいたようである。<sup>(23)</sup>文芸界へのデビューは、一七四七年の『考察』の出版を待たねばならない。本書の内容については、後の節で詳しく扱うため、ここでは『考察』出版以降のラ・フォンの活動を概観しておく。

ラ・フォンが『考察』で試みたサロン批評という形態はスキヤンダルを引き起こした。これ以降、彼が本格的に展開するサロン批評は、一七五四年に刊行された『所感』のみに留まる。<sup>(24)</sup>ラ・フォンの第一の関心はむしろ「ルーヴル宮」の方に移り、これを主題とする著作が『コルベールの影、ルーヴル宮、パリ市の対談』(一七四九年、一七五二年再版)

をはじめとして数冊続くことになる。<sup>(26)</sup> ルーヴル宮への並々ならぬ思い入れが窺われるが、同時に、『考察』で発表したルーヴル宮への王立美術ギャラリーの創設の提案が広く支持を得たことも影響していると考えられる。すなわちルーヴル宮は受けのよいトピックであることが、『考察』の反響から明らかになったのである。個人的な関心はもとより、受容者の反応を考慮して主題を決定したとしても不思議はないであろう。一文筆家として社会的な「成功」を望むことは当然であった。一七五〇年二月に故郷リヨンの科学・文芸アカデミーの賛助会員に迎えられたのは一定の名声の証しであろうし、<sup>(26)</sup>一七五二年の著作集の刊行が可能になったのも、相当数の受容者を得た結果であろう。

文筆家として社会的に認知された後の一七五四年に出版された第二のサロン批評『所感』は、長文や脱線が多くて読みにくい『考察』とは異なり、非常に穏やかな語調で書かれ、文体もより明快で整っている。また先にも述べたように、ラ・フォンは『考察』の第二版を改めて執筆し、一七五二年の合本に収めたが、こちらもやはり初版と比べて明瞭な文体で、伝統的な絵画論の形式を踏まえ、同時代の愛好家たちへの配慮に満ちた内容へと変更されている。

このような変化の背景には、個人的な地位の安定のほかに、自身が火付け役となつて増大あるいは激化したサロン批評の数々とは一線を画したいという想いも見え隠れする。<sup>(27)</sup>しかし、これは単に「どん底暮らしの三文文士たち」との差異化を図った結果なのだろうか。<sup>(28)</sup>彼が批評を「穏やか」なものに修正したことと、批評という形式から離れて、より好意的な反応が期待されるルーヴル宮のトピックへと主要テーマを移行したことを総合的に勘案するならば、別の意図を読み取ることも可能ではないか。もちろん、ラ・フォンは文筆家として社会的地位を確立することを望んでいたには違いない。だが『考察』の反響の大きさは、彼の予想を遥かに超えていたと思われる。結果的に彼は、それによつて高まった名声を利用して著述活動を継続し、アカデミシヤンの地位にも達したが、同時代人を非難したり、公衆のあいだに激しい論争を提供するといった行為が、彼の目的ではなかった。後の反発の大きさから、「クーデター」を引き起こしたとして攻撃的なパーソナリティのイメージが伴うラ・フォンだが、<sup>(29)</sup>その著述にはルイ十四世時代の称讃というテー

マが通底しており、アカデミーの伝統的なジャンルの序列を重視していることから、むしろ保守的な人物であったと考えるのが自然であろう。つまり、『考察』以降の著述スタイルの変更は、無用な批判を避け、自身の意図をより正確に伝達するためであったと理解されるのである。

晩年のラ・フォンは決して多産とはいえない。この時期のほとんど唯一の活動は、ピガニョル・ド・ラ・フォルス (PIGNIOL DE LA FORCE, Jean-Aymar, 1673-1753) による『パリ市と周辺の歴史的描写』(一七六五年)の編集への参加である。<sup>(30)</sup> 十七世紀後半から流行するブリスやソーヴァル、ドウザリエ・ダルジャンヴィルらによる旅行ガイドの列に連なる本書は、<sup>(31)</sup> 十巻から成る大部の著作で、パリやその周辺地域を対象として、歴史とともに主要な建造物やそこに含まれる美術作品を紹介している。もちろん「ルーヴル」に充てられた章もあり(第二巻)、ラ・フォンはこの章の記述にも関わったに違いない。

一七七一年六月十六日、ラ・フォンはパリで生涯を閉じる。このとき彼は独身で、サン・リトウスターシュ聖堂の近くで年金生活をしていたとされる。遺産目録によると、<sup>(32)</sup> 金銭に関しては、終身年金のほか、六〇〇リーヴルと三〇〇〇リーヴルの負債、そして宝石職人に対する五万五〇〇〇リーヴルの債権があった。二十冊ほどの書物についての記述もあり(書物自体は三四〇冊ほどあった)、教会の歴史に関する本や宗教書などが含まれている。彼の信仰心に言及した同時代人の記述もあり、<sup>(33)</sup> 狂信的なジャンセニストのコンヴァルション派の集会に参加していたという証言もあるが、<sup>(34)</sup> 信仰の実態はよく判っていない。

以上、ラ・フォンの生涯と業績を概観したところで、次に彼の主著『考察』の内容、および出版の背景について検討していきたい。

## 2. 匿名出版と「公衆」

ラ・フォンがどのような経緯で『考察』の出版を着想したのかは明らかでない。一七四六年八月二十五日から九月にかけてルーヴル宮で開催されたサロンを訪れ、<sup>(35)</sup> 出品作品に対する批評に加え、フランス絵画界全体に通底する問題を指摘し、その解決策を提示することを試みた。『考察』は次のような序文で始まる。

この小さな著作は、もともとは昨年九月にルーヴル宮で開催された絵画展の期間中に刊行するつもりで書かれたものである。しかし予期せぬ事態が、出版を今日まで遅らせてしまった。

本書にはあえて、本筋から離れた話題をいくつも挿入している。いくぶん愉快なものも含まれるが、それは文体に変化を持たせるためであり、またひとつの主題に関する長い論考につきものの、眠気を誘うような単調さを避けるためである。そうでもしなければ、退屈な讃辞の繰り返しから、どのようにして読者を救うことができるだろうか。

この小論がきっかけとなって、優美な文体に精通し、美しき技芸にも通曉した優れた文筆家の中から、<sup>(36)</sup> ぎわめて先駆的なものとなるであろう企てを遂行する者が現れることを望んでいる。

この序文にはラ・フォンの出版の動機を示すような記述は見当たらないが、ここで述べられている「予期せぬ事態」については、間接的な史料から推測可能である。ラ・フォンは、愛好家として高名であったバショモン



(BACHAUMONT, Louis Petit de; 1690-1771) に『考察』の草稿を送っていたようである<sup>(37)</sup>。同じく愛好家で著名な版画家・版画家でもあったピエール＝ジャン・マリエットは、「この『絵画に関する考察』の著者が正しい助言に従っていれば、それを出版することはなかったであろう」という手書きのメモを残している<sup>(38)</sup>。この「助言」がバシヨームンのそれを指すのか、あるいはマリエット自身が行ったものかは不明だが、いずれにしても出版に否定的な内容であったことは明らかである。このように、愛好家から事前に「反対」されていたために、ラ・フォンは『考察』をすんなりとは刊行できなかったであろう。

『考察』の出版時期は明示されていないが、上記の序文に続いて一七四六年十月の『メルキュール・ド・フランス』誌に掲載された「ボンヌヴァル氏からド・ラ・トゥール氏への手紙の抜粋」を引用していることから<sup>(39)</sup>、少なくともこれより後に刊行されたことが判る。手紙の作者の「ボンヌヴァル氏」という人物は特定されないが、一方の「ド・ラ・トゥール氏」は、王立絵画彫刻アカデミー準会員として同年のサロンに四点の肖像画を出品したモーリス・カンタン・ド・ラ・トゥール (QUENTIN DE LA TOUR, Maurice; 1704-1788) であろう<sup>(40)</sup>。ラ・フォンはこの手紙から以下の部分を引用している。

……この展覧会に続いて展示作品についての適切な検討を行い、それぞれの画家の特徴と、各画家がどの部分で優れているかを明らかにすることが望まれます。このような企ては、書き手に深遠な知識を要求するでしょうし、美術家を傷つけることなく有用な批評とするためには、文章の魅力がとりわけ必要とされるに違いありません。このような著作があれば、何がしかの資質を持ち合わせた観衆は徐々に教化され、私が幾度か耳にしてきたような奇妙な判断を作品について下すことも少しずつなくなっていくでしょう。たとえば、色彩の美しさに目が眩んで、衣服の襞の重苦しい描写や事物の不規則な配置を大目に見るようなことは

なくなるでしょう。堅苦しさを表現の力強さと、あるいは優美さを気取った表現と混同するといったような誤りを犯すこともなくなるでしょう。<sup>(41)</sup>

ラ・フォンがボンヌヴァルなる人物とどのような関係にあったかは判らない。だが、序文に続いてこれを枕に据え、この記事を批評執筆の着想源に仕立てて、自らの行為を正当化するような形を取ったのは、本書の出版が当時の美術界の慣習に反する行為であるという自覚があつてのことだろう。ラ・フォン自身、序文において、本書の試みを「きわめて先駆的」と述べていた。というのも、専門家がアカデミーの美術家たちに助言を与える例は前世紀から認められるが、そうした助言はあくまでも口頭で直接伝えるものだという、暗黙の了解の下になされていたのである。十八世紀に入ると、半ば官報的な性格の『メルキュール・ド・フランス』誌などが展覧会に関する記事を掲載するようにはなるが、その場合も、作品の「批評」は意図的に避けられ、作者名と主題、そして評価に関わらない短いコメントが加えられるに留まっていた。<sup>(42)</sup>たとえば次のような具合である。「……カルル・ヴァンロー 1.《狩りの休息》国王注文作品。この絵画は実に多くの鑑賞者を惹きつけた」。<sup>(43)</sup>

サロンの出品作品に対して、細かな美点や欠点を逐一指摘して評価を下すという行為を、ラ・フォンのようなアカデミーとは無関係の人物が行い、しかもこれを文章で著し、さらには出版して広く流布させるといえるのは、これまでの常識では考えられない前代未聞の試みだったのである。本書の出版地がラ・エ（デン・ハーグ）となつてゐるのは、おそらく検閲を逃れるための策であろう。匿名の出版とされていることも、しばしばこうした事情と結びつけて考えられているが、この点に関しては、後に述べる理由から、疑問の余地があると筆者は考えている。

さて、このボンヌヴァルの手紙に続いて『考察』の本文が始まるが、ラ・フォンはその冒頭でも、この批評の出版が正当な意図の下になされたのだということ、あくまでも美術の発展を目的としていることを強調している。

絵画と美術への愛、そしてそれらの向上に対する熱意。これが、今年、ルーヴル宮に展示された作品に対する所感を公に示すにあたつての唯一の動機である。その感想を決定的な評価として示そうというのではない。他人の判断を自分自身のものに從わせようとするほど愚かなことはない。だとすれば、同時に、いかなる感情とも、またいかなる個人的な利害とも無関係な、批判的ながらも慎重な考察を提示することは、文芸と同様に技芸の進歩にとつてもきわめて有用であろうと考えられる。このような考察は、作家たち自らの欠点を気づかせ、彼らを最高度の完成に向かわせることになるのである。<sup>(44)</sup>

このように『考察』の刊行理由を正当化した直後に、後に大いに問題視されることになる以下のような主張を展開する。<sup>(45)</sup>

展示された一点の絵画は、印刷されて世に出た一冊の書物に等しい。それは劇場で上演される演劇の一品とも同じである。すなわち各人が、それに対する判断を下す権利を持っているのである。ここに集約して作家たちに示すのは、公衆の最もまとまつた、最も公平な判断であり、決して自分自身のそれではない。たしかに公衆の判断は、先入見や性急さが災いして、奇妙であつたり不公平なものとなる場合も多い。しかし、どのような作品であつても、その美点と欠点に関する意見が一致したときには、公衆が評価を誤つてゐることはほとんどないと確信している。<sup>(46)</sup>

『考察』で展開するのはラ・フォン個人の考えではなく「公衆」の意見、それも彼らの一致した意見であり、これこ

そが公平な評価として、アカデミーの美術家たちに欠点を気づかせ、さらなる向上を促すのだというのである。これに従えば、『考察』の書き手は「公衆」あるいは公衆全体の意見を代表する者であり、実際の著者であるラ・フォンはあくまでもその「一代弁者」、あるいは公衆の意見をまとめた編者に過ぎないということになる。作品批評の主体は「公衆」であり、「私(je)」あるいは特定の個人ではない。だからこそ、『考察』の著者名は匿名である必要があった。ここから、匿名での出版は、先述のような美術界の事情の中で非難を免れようとする消極的な姿勢ではなく、むしろ彼の意図をより反映した積極的な選択であったと考えられるのである。

このような解釈は、ラ・フォンが『考察』以降の著作において著者名として使用した表記を検証することによって裏づけられる。<sup>(47)</sup> 完全な匿名を貫いているものもあるが、そうした著作と並行して、「D. L. F. de S. Ye.」「D. L. F. D. S. Y.」のような形で部分的に著者名を示唆したものも認められる。また『考察』の出版からまもなく、ラ・フォンはリヨンの科学・文芸アカデミーに『考察』を送付しているが、これを記録した同アカデミーの文書には、「九月六日にラフォン・ド・サン＝ティエンヌ氏より、彼の手になるとされている『フランスの絵画の現状に関する考察』(十二折版)と題された著作がアカデミーに提出された」とあり、『考察』の作者がラ・フォンであることがほぼ断定されている。<sup>(48)</sup>

さらに翌一七四八年、『メルキュール・ド・フランス』に『メルキュール』七月号に掲載されたアベ・レナル氏の手紙に対するラ・フォン・ド・サン＝ティエンヌ氏の応答」という記事が採録されているが、その中で著者自身が、『フランスの絵画の現状に関する考察』に続く私の手紙の中で述べたときには……(傍点筆者)と記している。<sup>(49)</sup> この引用に登場する「手紙」とは、『考察』の弁明のために一七四七年に出された『考察』の著者による手紙<sup>(50)</sup>のことであり、これを自身が書いたものであると認めたということとは、同時に『考察』の著者であることも告白したことになる。『コルベールの影』をはじめ、匿名で出版されたその他の著作は、一七五二年に『考察』の第二版とともに合本として刊行されているため、それらの作者もラ・フォンであることが難なく特定されることになるのである。

このように、『考察』の匿名性は、別の著作との照合や間接的な史料によつて容易に明らかになる程度のものであった。もしもラ・フォンが自身の存在を隠すために匿名を用いたのであれば、決して暴かれることのないよう、より慎重を期したに違いなく、一文筆家として匿名を貫くことにそれほど固執していたとは考えにくい。したがつて『考察』に關しては、やはり先述のようなラ・フォンの意図を汲み、著作の内容との關係で理解すべきであろう。

とはいえ、匿名での出版というラ・フォンの行為は、同時代人の目には卑劣なものとして映つた。<sup>(51)</sup> 彼らの反発はラ・フォン自身もあらかじめ想定していたようで、「公衆」を判断の主体に据えた段落の直後では、伝統的に助言者の役割を果たしてきた「目利き」への配慮も見せている。

賢明な目利きの判断を持ち出すのは、最大限の良心的な配慮と、いかなる人も傷つけまいとするきわめて現実的な心遣いからである。彼らは道德的規範を身につけており、またそれ以上に、感性と呼ばれる生まれつきの知性を備えている。<sup>(52)</sup> これがあればこそ、ある作品の不調和と調和を一見ただけで感じ取ることができるのであり、この感性こそが趣味の基礎を成しているのである。私は、この真の美に対する確固たる不変の趣味は、持つて生まれるという幸運に恵まれなければ、後に身につけることはほとんどできないものと理解している。<sup>(53)</sup>

ここでは、「目利き」と呼ばれる専門家が生まれながらに有している「趣味」、そしてこれに基づいて彼らが下す判断に一定の評価を与えている。そのうえで、次のように続ける。

助言や批判の助けを借りることなく、第一級の名声に到達する作家は稀である。とはいえ、同輩だけに頼

るのでは不足である。彼らのほとんどは、その技の美点と欠点を、味も素っ気もない規則に照らし合わせることで判断するか、あるいはしばしば画一的に繰り返されてきたように、自分自身の画法と比較するという習慣によつて判断するに過ぎないからである。したがつて、公明で良識のある観者にも耳を傾けなければならない。このような人は、絵筆を握つたことはなくとも、持つて生まれた趣味によつて、規則に拘泥することなく判断を行う。このような人々には、色調の適切さや細部の選択、部分や全体の効果、そして眼を魅了する画面全体の調和といった点について、いくらでも助言を求めるべきである。<sup>(54)</sup>

これらの二つの段落の記述は、その前の段落で前面に出された「公衆」との関係を考えるとき、いまひとつ明瞭ではない。上記の引用中の「持つて生まれた趣味」は、前段落の「感性と呼ばれる生まれつきの知性」に基礎づけられる「趣味」にあたると理解されるが、では「公明で良識のある観者」とは「賢明な目利き」のことを指しているのだろうか。それでは、やはり「目利き」の判断が「公衆」のそれに勝ることになるのではないか。

このような疑問の余地はあるものの、これらの二段落は、本書で「公衆」の判断を展開するという大胆な試みの、あまりに新奇な印象を和らげるという意図で加えられた可能性も否めない。したがつて、この部分のみをとらえてラ・フォンの真意を探ろうと試みることは避けるべきであろう。

以上は、いわば本文の中の「序文」にあたると考えられる。『考察』の主要な内容は、これに続いて展開されることになる。

## 注

### 【略記一覧】

AN: Archives nationales de Paris  
BNF: Bibliothèque nationale de France  
CD: Collection Deloynes  
MF: Mercure de France

- (1) [LA FONT DE SAINT-YENNE, (É.)], *Réflexions sur quelques causes de l'état présent de la peinture en France, avec un examen des principaux ouvrages exposés au Louvre le mois d'août 1746*, La Haye: Jean Neaulme (CD, t.II, n° 21; [4] –155p; in–12).
- (2) めいふん 本書は初めつのサロへ批評びなう。いれに先行するものには不足なあるが、その影響は限定的であつた。 *Lettre à Monsieur de Poiresson-Chamarrande, Lieutenant-General au bailliage & siege présidial de Chaumont en Bassigny. Au sujet des Tableaux exposés au Salon du Louvre. Paris le 5 septembre 1741*, [s.l.s.n.], 1741 (46 p; in–12).
- (3) 詳細は、拙稿「La Font de Saint-Yenne: sa vie et son oeuvre (1688–1771)」、『聖学院大学総合研究所紀要』、聖学院大学総合研究所、第四九号、二〇一一年、IV、一一–二六頁を参照。
- (4) 注3を参照。
- (5) 拙稿「美術における『公衆』の誕生——一七四〇年代後半の論争を中心に——」、『「橋論叢」、第一三二巻第二号、日本評論社、二〇〇四年、五五–七三頁。
- (6) Collection Deloynes. Collection de pièces sur les Beaux-arts imprimées et manuscrites, (recueillies par Pierre-Jean Mariette, Charles-Nicolas Cochin et M. Deloynes), 65 vols. représentant 2069 pièces, 1673–1808. 以下の史料はブリュエットの死後

版画家でアカデミー書記を務め美術関係文書の検閲官でもあったコシヤン (COCHIN, Charles-Nicolas, le fils; 1715-1790) と会計監査官ドロワヌ (DELOYNES) に引き継がれ、拡充された。六五巻に及ぶこのコレクションには、一六七三年から一八〇八年までのあいだに出版された諸展覧会の出品作品目録と批評パンフレット二千点以上が収められている。このコレクションの所収資料については次のリストを参照。DUPLESSIS, (G.), *Catalogue de la collection de pièces sur les Beaux-Arts imprimées et manuscrites, recueillies par P.-J. Maritte, C.-N. Cochin et M. Deloyne*, Paris: A. Picard, 1881.

- (7) [LA FONT DE SAINT-YENNE], *L'Ombre du grand Colbert, le Louvre et la ville de Paris, dialogue. Réflexions sur quelques causes de l'état présent de la peinture en France. Avec quelques lettres de l'auteur à ce sujet*, (nouvelle édition corrigée & augmentée), [Paris: Michel Lambert], 1752 (LXX-367-[1] p; front.: in-12).
- (8) [LA FONT DE SAINT-YENNE], *Réflexions ...*, Genève: Slatkine Reprints, 1970.
- (9) DEMORIS, (R.) et FERRAN, (F.), éd., *La peinture en procès: l'invention de la critique d'art au siècle des Lumières*, Paris: Presse de la Sorbonne nouvelle, 2001.
- (10) JOLLET, (É.), éd., *La Font de Saint-Yenne: Œuvre critique*, Paris: ÉNSBA, 2001.
- (11) より詳しくは拙稿「二〇一一年」<sup>42,43</sup> DESCOURTIEUX, (P.), *Les Théoriciens de l'art au XVIIIe siècle: La Font de Saint-Yenne*, *Memoire de maîtrise*, Université de Paris IV, 1978 を参照<sup>44</sup>.
- (12) AN, MC/LXXXV/635 [Procès verbal de transport et inventaire après le décès du S. de La Font de Saint Yenne, datée du 13 juil. 1771]. この文書は DESCOURTIEUX, 1978 に引用されている。
- (13) DECOURTIEUX, 1978, p.11.
- (14) « Ode sur les progrès de la peinture sous le règne de Louis-le-Grand », publié dans [LA FONT DE SAINT-YENNE], 1752.
- (15) AN, O1/3717/89 [Lettre de nomination, datée du 18 août 1729].
- (16) ラ・フォンの伝記を試みたデクルティウは、彼の数少ない手紙や旅行の記録から、この任務は七月九月の三カ月間であったと結論づけている。DECOURTIEUX, 1978, pp.13-14.
- (17) 解任の通知は以下。AN, O1/3717/96 [Lettre de démission, datée du 27 août 1737].
- (18) それらは《ディアナの水浴》(一七二八年)、『ローマの慈愛』(一七三五年以前)、『ガラテア』(一七三四年以前)であり、最



- 初の二点はジャック＝フィリップ・ル・バン (LE BAS, Jacques-Philippe, 1707-1783) にちいづ、最後の一点は画家自身とA・  
ーロン・マン (TROCHON, Antoine R.; ?-?) にちいづ、版刻者など。 Bibliothèque nationale de France (BNF), Département des  
Estampes, EE11/Fol.37, DB7/Fol.42, AA84/Fol.41.
- (19) BNF, NAF24340/17/f74-75. Repr. dans VOLTAIRE, *The Complete Works of Voltaire/Les œuvres complètes de Voltaire*, (publié  
par Th. Besterman), 135 vols., Genève: Institut et Musée Voltaire, [Toronto]: University of Toronto Press, 1969, v.86, pp.310-  
311, 317-318 (D583, D591).
- (20) *Réflexions*, p.20. マ・フォンはリヨへで唯一『趣味の殿堂』を所有していたとされ、ブロヤットはマ・フォンから同書を借  
用したとさう。
- (21) VOLTAIRE, « Sur le Louvre », *MF*, mai 1749, pp.27-28. マ・フォンはこの詩句を『偉大なニコル・ルの影』第二版で引用  
している。[LA FONT DE SAINT-YENNE], 1752, pp.177-178.
- (22) « Lettre de Voltaire à Marie-Louise Denis, datée du 9 juil. 1753 », in VOLTAIRE, 1969, v.98, pp.139-141. マリ・ル・フォンの  
名前が誤って「La Font de Saint-Yonne」と記されている。
- (23) DECOURTIEUX, 1977-1978, p.29.
- (24) [LA FONT DE SAINT-YENNE], *Sentimens sur quelques ouvrages de peinture, sculpture et gravure, écrits à un particulier en  
province*, [s.l.s.n.], 1754 (CD, t.VI, n° 69, I-VI, 3-182 p; in-8).
- (25) [LA FONT DE SAINT-YENNE], *L'Ombre du grand Colbert, le Louvre et la Ville de Paris, dialogue*, La Haye: [s.n.], 1749 (165p.;  
in-12). その他の著作のリストは、拙稿『二〇一一年に示している』。
- (26) Archives de l'Académie des Sciences et Belles-Lettres de Lyon, tXXIV, recueil 266, F8, n° 692. repr. JOLLET, 2001, n.16.
- (27) 同様の指摘をジョーレが行っている。JOLLET, 2001, p.275.
- (28) ロバート・ダーントン『革命前夜の地下出版』、関根素子・二宮宏之訳、岩波書店、一九九四年。
- (29) DÉMORIS, (R), « Le coup d'État du connaisseur délicat et sévère », in DÉMORIS et FERRAN, 2001, pp.65-85.
- (30) PIGANOL DE LA FORCE, (J.-A.), *Description historique de la ville de Paris et de ses environs*, 10 vols., Paris: Chez les Libraires  
associés, 1765.

- (31) [BRICE, (G.)], *Description nouvelle de ce qu'il y a de plus remarquable dans la ville de Paris*, Paris: N. Le Gras, 1684; SAUVAT, (H.), *Histoire et recherches des antiquités de la ville de Paris*, 3 vols., Paris: Charles Moette, etc., 1724; [DEZALLIER D'ARGENVILLE, (A.-N.)], *Voyage pittoresque des environs de Paris*, Paris: De Bure l'aîné, 1749.
- (32) AN, MC/LXXXV/635, op.cit.
- (33) BNF, Arsenal, MS4041/f.109; PIGANJOL DE LA FORCE, 1765, t.1, p.viii.
- (34) « Procès-verbal dressé par M. de La Condamine », *Correspondance littéraire, philosophique et critique de Grimm et de Diderot depuis 1753 jusqu'en 1790*, (nouvelle édition), 16 vols., t.3, 15 avril 1761, pp.18–20.
- (35) アカデミーでは十七世紀末から、会員が制作した作品を一同に集めた展覧会を開く慣わしがあり、一七三七年以降は毎年この時期にルーヴル宮の「サロン・カレ」（方形の間）で開催するようになったことから、この展覧会は「サロン」と呼ばれるようになる。
- (36) *Réflexions*, 1970, p.ii.
- (37) ちなみに、バショームンは自身の覚書の中で、「私は『考察』の」著者を知らない、「著者はまったく知らない。本当だ。それが、私がこの著作に何ら関わっていないことの証拠である。著者以上に、いくつかの詳細な点については心得ている。もしも著者が事前に私に知らせていたなら、この著作に散見される誤りはなかったであろうと言いたい」と述べている。『考察』の出版があまりに大きな反発を引き起こしたために、巻き添えにされることを避けるべく、自らの立場を正当化したのかもこれなう。《Mémoire de Bachaumont, mai 1749 », BNF, Arsenal, MS4041/f.109.
- (38) 《Note de Mariette à propos de cette brochure [Réflexions] », s.d., CD, t.II, n° 23, p.229.
- (39) 《Lettre à M. de la Tour par M. Bonneval, du 21 Septembre 1746 », *MF*, octobre 1746, pp.137–139.
- (40) ボンヌヴァルはこの引用部に続けて「ラ・トゥールが出品した肖像画を称える散文を披露している」。
- (41) *Réflexions*, 1970, p.iii.
- (42) 一七二五年の展覧会に関する記事では、「美点や欠点に関する観察は行わない」と明言されており、これは一七三七年の展覧会についての記事でも繰り返われている。*MF*, sep. 1725, pp.2254–2255; *MF*, sep. 1737, pp.2013–2017.
- (43) *Ibid.*, sep. 1737, p.2019.

- (44) *Réflexions*, pp.1-2.
- (45) この点については、拙稿「二〇〇四年を参照」。
- (46) *Réflexions*, pp.2-3.
- (47) ラ・フォンの以後の著作における著者名の表記については、拙稿「二〇一一年を参照」。
- (48) Archives de l'Académie des Sciences et Belles-Lettres de Lyon, recueil 266, t.XXIII, cité par JOLLET, 2001, p.27, n.10.
- (49) « Réponse de M. de La Font de S. Yenne, à la lettre de M. l'abbé Rainal, imprimée dans le *Mercur* de Juillet », *MF*, septembre 1748, p.80-83.
- (50) [LA FONT DE SAINT-YENNE], *Lettre de l'auteur des « Réflexions sur la peinture », et de l'« Examen des ouvrages exposés au Louvre en 1746 »*, [s.l.s.n.], [1747] (CD, t.2, n° 22 ; 31p; in-12).
- (51) 拙稿「二〇〇四年を参照」。
- (52) 「感性 (sentiment)」: 十八世紀初頭に『詩と絵画についての批判的考察』(一七一九)を刊行したデュ・ボス (DU BOS, Jean-Baptiste; 1670-1742) は「これを「画家、もしくは音楽家が模倣した事物について判断する感覚」、「第六感」としており、ラ・フォンと同様に美を感得する感覚器官と見なす」。DU BOS, (J.-B.), *Réflexions critiques sur la poésie et sur la peinture*, 2 vols., Paris: J. Maricette, 1719. 邦訳『詩画論』(一・二)「木幡瑞枝訳」玉川大学出版部「一九八五年」。
- (53) *Réflexions*, pp.3-4.
- (54) *Réflexions*, p.4.